

郷土を語り  
人々の輪が広がる

# 東京奈良県人会だより

編集発行所：一般社団法人 東京奈良県人会 発行人：西 与吏郎（2015年春号）

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-6-3 奈良県東京事務所内 電話 03-5210-2838 HP: <http://tkynarakenjinkai.jimdo.com/>

TOKYO NARA HUMAN NETWORK NEWS NO. 36

## ●● 平成26年度『ふるさと奈良の集い』 ●●

平成26年11月7日、平成26年度『ふるさと奈良の集い』が新橋第一ホテルにて奈良県と共催にて開催されました。当日は当県人会62名の他、奈良県議会、各市町村議会関係者など223名の参加の下、当会西会長、荒井奈良県知事はじめ、県議会議員、国会議員の皆様からのご挨拶、日本陸上競技連盟会長の横川浩様による乾杯のご発声、その後、和やかに懇親・交流が続きました。そして日本テレビ放送網の笛吹雅子様の中締めにより、盛会の内にお開きとなりました。ここでは、紙面の関係上、西会長、荒井知事のご挨拶の概要のみご紹介いたします。

### 【挨拶 東京奈良県人会会長：西与吏郎】



こんばんは。今年もまた『ふるさと奈良の集い』がやって参りました。忙しい中、本当にありがとうございます。平素のご協力、ご支援を厚く感謝いたしましてここに御礼申し上げます。

お陰をもちまして奈良県人も念願の法人化いたしまして、この6月より一般社団法人東京奈良県人会として新しく出発することになりました。会員も段々と増加しつつあり、特に若手の会の、若い方々のふるさとへの想いが大変高まっております。今後の活躍を期待している次第です。また先人達の喜びも一入かと思えます。これからも県人のお力を、県のお力添えをいただきながら一層の郷土愛を深め、会の健全なる発展を目指し、役員一同努力していく所存でございます。今後ともご協力の程よろしく願いいたします。

### 【挨拶 奈良県知事：荒井正吾】



この縁の会で西県人会会長はじめ東京におられる方がこのようにいつも人を集め、大事に日頃の交流を重ねていただきまして感謝申し上げます。また、奥野誠亮先生が100歳を超えられましたが、こうして毎年お越しくださいます長寿の見本を見せていただき本当にありがとうございます。

この会は分かる範囲でなるべく地域別、ご出身地別に配席しておりますので、テーブルで知らない人がおられたら「お前何処の町や?」という風に聞いていただきますとちょっと話が弾むのではないかと思います。そして、この会は肩書きなしで色々な立場のお話をしていただく会でございますので、思わぬ同じ町のご出身者で色々頑張っておられる方がいると思いますので、是非途中で席をどんどん替わられて話を弾ませていただけたらと思う次第でございます。どうぞひとときごゆっくりお過ごし下さいますようお願い申し上げます。



## ●● 東京奈良県人会 平成26年度文化交流会 ●●

当会では恒例の文化交流会として、平成26年12月10日、菩提山真言宗正暦寺住職 大原弘信師をお招きし、『奈良は清酒発祥の地 ～菩提泉という僧坊酒の歴史的価値について～』と題して、都道府県会館会議室にてご講演いただきました。ここではその模様をダイジェストでお伝えします。

### 【会長挨拶】



**西会長:**この寒い中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。平素はご協力・ご支援賜り、ありがたく感謝いたします。この文化交流会も恒例行事として定着し、いろいろな先生方にご講演いただいて教養も高くなったかと思えます。また、この交流で一段と県人会会員同士の関係も深まったとつくづく感じております。これからもますます交流会に出席いただいて、そして皆さんのいろいろなご意見を頂きながら、県人会を発展させていきたいと思っております。今後ともよろしくご協力のほどお願いいたします。



### 菩提山真言宗正暦寺住職

#### 大原弘信 師 略歴

昭和28年生まれ、  
 県立奈良高校、広島大学教育学部(高校社会科)卒  
 昭和53年から奈良県教職員(山辺高校、奈良商業高校)、  
 昭和59年菩提山真言宗正暦寺福寿院住職、  
 平成15年より現職

### 【講演会】

**大原師:**正暦寺という寺の創建に関わったのは一条天皇です。一条天皇の奥さんでもありました藤原中宮定子、これは藤原道長のお兄さん、道隆の娘ですけど、この教育係が清少納言、そして一条天皇の2人目の皇后となりました中宮彰子、これが藤原道長の娘ですが、その教育係が紫式部ということなので、一条天皇よりそちらのほうが有名ですね。

#### 天皇の勅願で大伽藍正暦寺を建立

正暦2年という年に天皇が成人式を挙げておられます。今の成人式ではなくて、あの当時は12歳です。数えですよ。満で11歳ですから現在の子どもたちで言えば、小学校5年生ですね。小学校5年生になりますと成人式が執り行われるようになる。それが正暦2年です。ですから恐らく一条天皇の周りの取り巻きの方か一条天皇ご自身が、ご自分が成人式を挙げた記念すべき年号の寺を建てたいと願ったわけです。

天皇の勅願で正暦寺が建ったわけですから、国費を費やして建ったわけです。私は子どものころに親から、「藤原道長が正暦寺に来てどうのこうの」という話を聞いていました。適当な話だと思っていました。ところが自分で調べてみたら、適当ではないかと。今言ったメンバーがいるときに国費を費やして造ったことが分かってきた時に、中途半端な寺が出来ている訳がないなと思ったわけです。今皆さん方が奈良に来られて正暦寺に入って来られご覧になれるのは、ほんの一部です。正暦寺には、興福寺の住職の別所がありました。興福寺の住職が現在の奈良ホテルの所にあった大乘院に住んでいて、エネルギー補給に山へ行くのです。それがここのです。山でエネルギー補給、座禅をしたりして、また奈良へ帰って来る。そのためにつくった大伽藍は、興福寺住職そのものが移動して生活する建物です。

1180年に平家が奈良へ攻めて来ました。それで奈良の僧兵に戦ってもらったんですが、負けてしまいました。奈良坂で戦いが夜になってしまって、見えないので民家に火を放ちながら、戦っているうちに強風に煽られて奈良が燃え出したので、平家は寺も燃やしたわけです。奈良側は「参ったー」と言ったのだけれど、平家は武家社会ですから敵の頭領の首を取らないと終われない。奈良の僧兵たちの頭領は誰かと言ったら、奈良でいちばんでかい興福寺の住職です。その住職を殺して初めて平家は敵の頭領の首を取ったと帰れるわけですね。その住職は誰かと言ったら、大乘院に住んでいた信円という住職です。

その人が自分が狙われていると分かったものだから、自分の別所、ここの正暦寺に逃げて来た。来なかったらよかったです。そのままここで捕まって死んでいればよかったですね。そうしたら

うちは助かったわけです。ここに国宝がごそつと残ったわけです。しかし正暦寺の山が平家の軍勢に囲まれてしましまして、創建200年ですよ。平安時代のいちばん華やかなりしこの頃につくった国立の寺が全部消えたのです。灰塵と化してしまったのです。正暦寺の歴史で、いちばん悲しい事件ですね。これももし残っていればすごいことなんです。

### 平安期の正暦寺の年間予算200億円

正暦寺には、この山全体に楽人・音楽隊がいました。雅楽の楽人です。そして楽器の名工もたくさん出て来ました。正暦寺僧侶の貞俊というお坊さんがつくった笙は日本で演奏することの出来る最古のものだそうで、彼は、名工と言われました。その他には名工慶俊の笙、皆が本当に欲しがったという笙です。そのようなものも、この山でつくって外部に出ているわけです。今で言ったらバイオリンを1本・1000万円で売するようなものですね。

本当に何も残らなかったがために、あの寺は何もなかったかのごとく静まり返っているわけです。そういう寺でございます。

そこでこの寺がどのくらいの経費を費やして維持していたかということですが、これは確かなことかどうか分からないですけど、記録を見ますと、鎌倉幕府を建てた源頼朝は、銀の重目かんもんで1000貫文というのを正暦寺に運営経費の保証をしていたと言われてますが、平安時代にはその3倍、3000貫文であったと言われてます。

1000貫文というのは、今の貨幣価値で60億円くらい、3000貫文だと200億円近くになります。ですから平安当初建った頃は大体年間100カ所ほどの寺を動かす運営経費は大体200億円くらいで経営されていたという理解です。それが実はだんだん時代とともに変わっていく。

何かと言ったら、その保証をしていた国がぐらつく時が室町なのです。そのときに、国が保証してくれているはずのものが入って来なかったら、何とかして自分で儲けなければいけない。そこにこのお酒が登場してくるんです。

### 財政維持のための薬、酒造り

先ほどの楽器もそうです。売れるものは何でも売らなければならぬ。味噌も売ったという記録があります。米を作れたら、味噌も作れますよね。そういうのは山から出て来ます。

正暦寺は本尊さんが薬師如来様ですので、薬、漢方薬も作っていました。だから正暦寺の山野には薬草がいっぱいあります。奈良女子大学の菅沼先生に、当時調べていただいて、薬草が220種類あることが分かりました。それは薬師さんが本尊さんだから、漢方薬を作ったんですね。当時の寺院の考え方が中国の文化を継承していますので、そこに紹興酒が入ってくるんです。これからご紹介する正暦寺のお酒の作り方が、紹興酒の作り方とそっくりであると、東京農大発酵工学の鈴木明治先生がおっしゃっていただきました。

室町時代に、『御酒之日記』というかたちで書かれた酒の造り方を書いたものがあります。どのようにしてお酒を造ったかということが、詳しく書いてあるのですが、今まで、この書いてある意味が分からなかったのです。

ここには、お酒の名前を菩提泉せんと記されています。今現在は正暦寺と言っていますが、これは正しくありません。皆さん高野山に行くときに、ちょっと高野山に行って来ますわと言いますでしょ。高野山の中心伽藍金剛峯寺に行って来るとは言わないでしょ。同じなんです。正暦寺も、これは宗教都市だから、菩提山という宗教都市なんです。だから菩提山というのは正暦寺そのものの宗教都市の名前なんです。これが本当は正しいんですね。正暦寺というのは、その中の中心伽藍を言っただけのことです。

そういう意味ではその菩提山という山を泉になぞらえて売りましたので、歴史的に名を残したのは、この菩提泉いひと書いたほうになり、酒の名前で山号ではありません。

それでこれは「白米一斗を澄ますほど洗うべし」と。米をまずちょっと澄むくらいまで洗いなさい。要するに3回くらい洗ったくらいであまりたくさん洗ったらいけません。なぜかと言うと、米のとき汁があつた白いのを菌が食べます。ですからあまりきれいにしただけは駄目なんです。

それでそのうちの1升を取っておたいにすべし・ご飯にしない。おたいというのはお炊き上げのご飯にしない。夏季であれば、そのご飯をよくよくさますべく候。夏、大事なことはここなんです。今でも酒は冬に造ります。ところが600年前になぜ夏に造っていたのか、これが誰も分からなかった。夏にてあれば、そのご飯・飯いひをよくよくさますべく候。それをざるに入れて冷やし、米の中に置くべし。くちを1日つつみて、つつみおいて、1日包んでおいて、一夜置くべし。

水の底に生米9升があつて、そこにご飯をだかせています。その生米9升の上にある水・にごり水、その米のにごり水を狙って食べに来るやつがいるのです。これが乳酸菌です。乳酸菌取りですね。

それまでの酒造りはおけにご飯と水と麴米ですね、麴を入れておいたら空気中にある野生酵母、酒の酵母が入ってきて酒が出来るのです。そうしたら失敗もするし成功もする。成功はいいのですが、失敗は怖い。大量につくって失敗したら、みんなほかさなあかんからね。ですから成功する確率が低かったのです。

### 乳酸菌ラクトコッカス・ラクティスラクティス・ボダイセンの発見

ところがここなんです。乳酸菌。こんなふうにして置いておいたら何が起るかというと、甘酸っぱい液が出来てきます。夏ですからすぐに出来てきます。だから知らない人は腐っているのかなあと思います。知っている人は、この匂いは酒の菌が入ったなと。要するに酒には、酒の乳酸菌、酒の発酵菌と酒の麴菌と、酒の3つの菌が要るのです。その乳酸菌がここに入ってくるのです。これが大事なことです。この酸が雑菌の殺し役をするのです。それをまず2日間です。

これが紹興酒と全く一緒だそうです。鈴木明治先生が言われます。生米を使って、その生米のとき汁に乳酸菌を入れ込んで、殺菌してくれる液をまず造るというのが、紹興酒と全く同じだというお話です。

その状態からこれを2日か3日置いたら、本当に何とも言えないヨーグルトっぽい状態になります。これは平成10年に正暦寺で見つかった乳酸菌であるラクトコッカス・ラクティスラクティス・ボダイセンという酒造りに大変有効な乳酸菌だったのです、ただの乳酸菌ではないんです。ラクト系ですからヨーグルトと同じ系列の菌が見つかったのです。この菌が実は30～32℃ですごく発酵するのです。夏でバッチリなんです。冬はなかなか発酵しない。

夏にこれが発酵しましたら、次にこの水と米を分けまして、もう1回乳酸の水だけ底に引いて、米はごはんにします。ごはんはごはんのままで、もう1回その水の中に持って行きます。生米はごはんにしてその水に入れます。ここに麴も入れます。仕込み水も入れます。そして去年造っておいた酒のもろみを入れます。要するに酒の菌を入れます。そうするとそのときに入れた菌だけを発酵させて、他の酒の菌とか雑菌は全てそのラクトコッカス君が殺し続けてくれます。ここが大事ですね。夏に造っても腐らないということです。殺し壊し続けてくれます。

殺し続けてくれまして、次に大事なことは、酒の菌が8度とかのアルコールを発酵してきます。そうしますとラクトコッカス君はそのままだと邪魔ですので、酒の菌のえさになって消えるのです。これが酒の乳酸菌です。最初の殺菌作業が終わったら、酒の酵母菌のえさになって消えるという大事な仕事があるんですね。それが酒の乳酸菌で、平成10年に見つかりました。その温度が30～32℃ですごくよく活躍してくれるのです。ですからその状態で酒を造ったら1週間で出来てしまいます。

#### 「夏にてあれば」の謎

面白いことは、「夏にてあれば」ということなので、皆あの当時600年前に夏だけ酒は造っていないんですよ。ということは8月10日過ぎから酒を造ったら、8月20日か25日くらいに、完璧な酒が出来ているわけです。

そうしたら世間の冬に造った酒は4月、5月で飲み干して無くなっています。たまには氷室で置いている分があるかもしれませんが。皆がにごり酒を飲んでるときに、やおら正暦寺から、「どうぞ」と言って、清酒が出て来るわけです。当然高く売れますよね。買ってくれる人は月見をする人とかね。京都の町とか、上流貴族は買ってくれます。

ですから正暦寺の山の中では門を閉ざして、その中で薬を造っている、酒を造っている、道具を造っている。中には武器を造っている。正暦寺の山の中はそんな状態で、この1400～1500年頃を過ごしているわけです。

そして先ほど申しましたように、その酒は奈良の町、京都の町に売りに行って上流貴族に売り付けますので、結構いい値で売れたのです。

あの当時正暦寺が本山の興福寺に運び込んだ酒の税金の額が出て来ます。銀の重さにして300貫目。大体平均50～60貫目。戦争とかでたくさん徴収される時で300貫目。こんなかたちで正暦寺は酒の税金を本山興福寺に払っています。これは『大乘院寺社雑事記』と言ひまして、大乘院におられた尋尊というお坊さんが書かれた日記に累々と記録が残っております。

ですから『大乘院寺社雑事記』に出て来るのは菩提山から今の税金に当たる壺銭が今年60貫文上がりましてとか。それからもう1つは、これが三荷、五荷、ウシ、ウマに引かせて荷物が着いたと。これを酒樽と言ひます。昔、酒樽は木で作ったんですよ。酒樽、荷荷着いたかと、荷物でどれだけ着いたかと、この2つが累々と『大乘院寺社雑事記』に出て来るんですね。それで興福寺の財源を支えたり、正暦寺の財源も支えたのです。

そこに仮計算を、これはちょっと合わないかもしれませんが、推して知るべしというところでございまして、大阪の米相場記録から計算をすれば、税金は今のお金で19億円ということになります。それが正暦寺も支えたり、本山興福寺も支えた。

お酒は夏に造りました。ですから8月末から9月20日頃に行われる月見夜会、10月初めの秋祭、どこでも酒を持って行くぞというかたちですね。皆さん方普通の酒屋さんが11月から仕込んで、12月頃出来上がって来るまでは、一人舞台でいくだけでも売れるわけです。そういう酒ですね。そういうことで夏に出来ますから、当然冬は部屋を温めたら出来るわけです。そんなことをやってお酒を出していました。

この事については先ほども言ひましたけれども、平成10年段階まで分からなかったのです。この「夏にてあれば」とは一体何のことか、酒なんか、夏になんか造ったら腐るではないかと。カビでもすぐ生えるではないかと。こんなときに造る酒なんかどんなふうにするのか。こんなもの、嘘に違いないということですね。

ところが平成の8、9、10年ですね。奈良県工業試験センターと日本原子力開発機構という人たちが入ってきて、正暦寺の中の酒の菌、乳酸菌、麴菌、それから空気、水の分析を行ったわけです。そして3年目に先ほど言ひました乳酸菌ですね。酒にとって必要な乳酸菌です。邪魔をしないと言ひます。それと酒の菌が見つかった。しかし麴菌がまだいいものが見つからない。探し中です。麴菌はいくらでもいるんですよ。けれども日本全国のトップレベルと対抗できる麴菌が見つからない。仕方がないから、今ここに入れている麴菌は大阪の樋口松之助商店という麴会社から有能な麴を買ひまして、それで造っているという状態でございまして。

もうひとつ大事なことは、お酒が出来てきたら最後まで造り上げないということです。それまでは樽に、先ほど言ひましたようにごはんと麴と仕込み水を入れて、適度な温度15～20℃にしておくと、野生酵母が入って来て酒が出来るんですよ。出来たらそれで仕舞いなんです。菩提配仕込というのはそうではなくて、出来ていく途中で作業を変えるんですね。酒がブクブク元気になるってきたら、今、元気だなという状態、科学的に言ひましたら大体度数が11～14度まで。酒は放っておいたら20度くらいまで行きますからね。12～14度くらいまで、もしくは早かったら11度くらいで一遍休憩してもらおうのです。休憩しまして、酒母という状態、まだ出来上がっていない元気な菌をいっぱい持った状態で、もう1回仕込み直しをするんです。何をするのかという段付け仕込みです。元気な段階のときに水と麴と蒸米を入れまして増やすのです。増やして混ぜて、また次にブクブクと

元気になってくるのを待つのです。

元気になってきたらまた仕込むのです。そうしますとどこまで膨れ上がるかということが分かったのです。13倍です。13倍まで膨れ上がることが分かったから、大量に膨れるということが分かった。

ですから大事なことは、均質な酒、去年も今年も同じような酒が大量に腐らずに造り込んでいけるという技術、それが基本は紹興酒なんですね。あの当時漢方薬に興味のあった正暦寺のお坊さんか誰かが中国から来た紹興酒に目を付けたんですね。葉にもなるし飲んだらうまい。売れたら高い。面白いのは、大体そういう興味のある人は造ってみますよね。造って見たら出来たということは、この山の空気中に酒の菌がいるということなのです。菌までは輸入していませんからね。そのままでおいしいけれども、それを改良してもおいしいわけです。紹興酒は餅米で造っているわけです。これをうるち米、食べるご飯で造ったんですね。紹興酒は長期保存しますから色は茶色いんですね。あれは長い間保存したら酒でもあんなになります。それをすぐに出します。だから透明なんですね。その2つが違うだけなんですよ。

そのようなことを当時やった。ということが、当時この『御酒之日記』からほぼポーッと見えてきたのだけれど、先ほど言いましたなぜ32℃という高温で造るのかということが分からなかった。それは乳酸菌なんですね。酒の乳酸菌が30～32℃で見事によく発酵して、夏のほうが造りやすくてそれを使うと腐らないということが分かったのです。それで夏に造った。

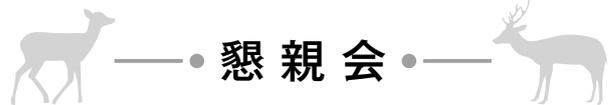
ですからなぜだか分からないけれど、あそこの酒は何で夏に造って出て来るのだらうと皆が首をひねっていたわけです。けれどもおいしいから京都の貴族たちは一生懸命、高く買ってくれる。そのようなことだったわけです。

#### 利益追求型の経営方針への教訓

『大乘院寺社雑事記』に出てくる正暦寺の記録には、<sup>さかだ</sup>榎と壺銭に関するもの以外に争いごとについて書かれています。正暦寺における経済活動が隆盛になれば、百を超える僧房の維持管理や酒をはじめとする経済商品の製造を支える多種多様な職人を数多く雇用しなければなりません。また、世情が不安定であったことから境内を警備する武士も必要でした。室町時代末期は、幕府の統治力が衰えたことにより、地方各地で多くの戦乱が起きましたが、そのような戦乱で敗残兵となった武士や土地を追われた領民が、職を求めて正暦寺に多数入山してくるようになりました。そのような半僧半俗的な集団構成員は、寺領内の学問僧(学衆)とは区別して禅徒と呼ばれていました。『寺社雑時記』寛正6年(1465)の記録によりますと、「菩提山の禅徒の間で喧嘩が起き2名が死んだ。中尾大坊に集まっていた学衆がこれを見て喜んだため、禅徒が怒り学衆4人と部下2人を殺してしまっ」とあります。中尾は境内を流れる菩提川の複数の源流が合流するところで、そこで酒造りをしていたのですが、そこを警護していた禅徒の間で喧嘩が起きたと思われる。また、大坊は真言宗の修験道の修行僧(行者)を認定する大きな権利を持つ全国十二の寺のうちの一坊でし

た。正暦寺はその株のうち二株を持っておりまして全国的にも大きな権力を持っていたようです。このほかにも禅徒がからむ争いごとの記録が数多くみられまして、そのような争いごとを嫌って多くの学衆が寺を離れてしまいました。これによって寺の経営が次第に学問僧の手を離れることとなり、また争い事が絶えないことが、時の為政者によって正暦寺の活動が規制されることにつながっていきました。学問に専念した唐招提寺が残ったのに対して、経済活動に重点をおいた正暦寺が衰退していったことは、寺院が利益追求型の経営方針に走ることに對する教訓とも考えられます。

最後になりますが、「奈良県菩提配による清酒製造研究会」には当初奈良県内酒造会社15社、現在は9社に参加いただき、技術的な面では奈良県工業技術センターの研究者、国税局技官の皆様の支援をいただきました。また、文書資料は天理大学から提供いただきました。このような研究会の活動によって菩提配が夏温度でも酒の仕込みができる技術であることが明らかになり、菩提配を復活できたことに対して関係された方々に改めて感謝を申し上げますとともに、東京奈良県人会の皆様には本日菩提配紹介の機会をいただき、県外からもご支援いただいておりますことに重ねて御礼申し上げます。ご清聴ありがとうございました。合掌。



講演会に続き、同会館内レストランカラムにて大原師がお持ちになられた奈良県菩提配による「嬉長」(中口)、「鷹長」(甘口)、「百楽門」(辛口)を試飲しながらの懇親会が開催された。

**藤本理事:** 皆さん、こんばんは。これから懇親会を始めたいと思います。

先生、どうもお話、ありがとうございました。僕も奈良出身ですけれども、いろいろな新しい情報が入ってきて、また奈良に帰りたいなと思いました。

それでは時間も押してきましたので、乾杯に移りたいと思います。そうしましたら奈良県人会の鳥居理事から乾杯をお願いしたいと思います。

**司会:** ビールは行き届きましたでしょうか。はい、よろしいでしょうか。それでは鳥居理事、よろしく願いいたします。

**鳥居理事:** 始まりの奈良、うまし奈良、そして皆さんの熱い瞳をいま一度奈良のほうに向けていただいて、乾杯をしたいと思います。はい、カンパ一!

(歓談)

**司会(藤本理事):** 皆様、今回初参加の方をご紹介させていただきます。ありがとうございます。

株式会社奥村組の東京支店執行役員支店長 丸山豊様。

**丸山(大和郡山市)**：高い所から失礼いたします。昭和28年1月生まれ、大和郡山出身の丸山でございます。東京は今3年目でございますが、奈良弁で堂々とお客さんに営業しております。何とか奈良の名前を広げたいと思っております。高校は奈良高校でございます。

**上田(奈良市)**：今、日本繊維産業連盟におりまして、もう奈良を出てから32年くらい。この会は私、ずっと会費は納めてきたのですが、これこそ幽霊部員で来たので、今日は初参加ということで、先輩方の皆様、本当にどうも、よろしく願いいたします。

私は今、奈良市に母親と兄夫婦がおりまして、この間、中国、韓国との繊維の業界団体の会議が大阪でありまして、その後60名くらいを奈良のほうに連れて行きました。奈良公園にシカがおりましたら、皆キャッキャッキャ、騒いでおりました。そんな感じで、やはり奈良は歴史の接点であるということで、非常に皆感銘を深めておりました。これからもよろしく願いいたします。高校は東大寺学園です。

**藤本理事**：続いて久しぶりにご参加の方よろしく願います。

**吉森(奈良市)**：奈良高校を45年に卒業しました吉森でございます。春日中学、奈良高校とその間だけ奈良にいました。親父が役人をしていたので転々としておりました、就職してからはずっと東京でございます。東京でも、今はもう63歳になりましたので、こちらで41年。このうち奈良県人会だけが奈良で過ごした時代を思い出させる唯一の会であります。日ごろ忙しくしておりますので、なかなか参加できなかつたのですが、今回はお酒の話が聞けるということで、実は百薬も春鹿が私の好みでございます。

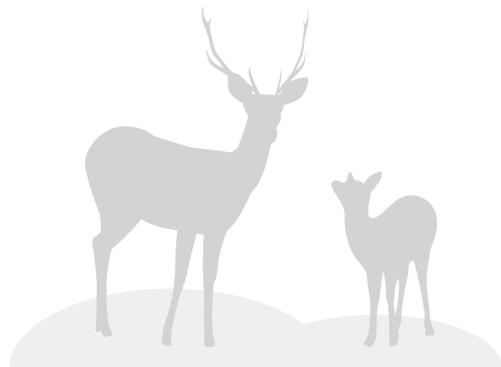
**東(十津川村)**：かの名門十津川村の出身でございます。3年前は皆さんからもご援助いただき、義援金をいろいろと頂戴しましてありがとうございました。あの年は大変でした。福島であいう問題が起き、そして紀伊半島が9月にはえらい台風の災害を受けました。もっとひどいのは明治22年、ちょっと古くなりますけれど、大災害を受けましてね。その時の3分の1くらい

住民が全部北海道に行った。そして北海道で新十津川という村をつくりまして、今はもう町になっています。十津川のほうは村なのだけれど、この新十津川と村とが一緒になって、117年前に関東十津川郷友会こうゆうかいというのを作りまして、それが出来上がって今もめんめんと続いているわけでございますよ。そういうことで117年という歴史から言うと、十津川は名門なんでございます。それよりもっと30年ほど古い十津川高校が、この10月末から11月の初めにかけて、150周年の記念式典を行ったのです。これが文武館です。誰が建てたかということ、これが何とあろうとか孝明天皇がお前のところ、この金をやるから何とかせよと言われて、はい、分かりましたということで、そのお金を頂戴してそれで出来上がったのが学校。十津川村の十津川高校の前の文武館なんです。名門でしょ。

**樋口(奈良市)**：先ほどから高校の話が出ています。最初は青々中学という東大寺のあれがございまして、そこへ入らせていただきましたけれども、お金が続かんようになって女子大附属のほうへ入りました。ちょうど男女共学になって3年目で男子のトイレが少なくて困った経験がございまして。その後いろいろございましたけれども、私が奈良でいつもいちばん思い出すが、『ヤマトタイムス』という新聞がありまして、昭和30年頃、ミスターヤマトという特集がありまして、どういう訳か私が入りました。それでコンテストに來いと言われてましたが、どうもコンテストだけは恥ずかしいというので行かなかったのですが、そういう楽しい思い出もございまして、本当に奈良というものを懐かしく思っている次第です。

今は緑化といいますか植林の仕事をしておりまして、中国のほうで緑化の指導をしております。またいろいろと皆さん方からお話を聞いて参考にさせていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

公務でお忙しい中、参議院議員で元国土交通大臣の前田武志先生のご挨拶につづき、新年会講師を務める予定の中村理事の中締めにて、盛会の内お開きとなった。



## ●● 平成27年 東京奈良県人会新年賀詞交歓会 ●●

当会では、平成27年2月3日、新年賀詞交歓会をSun-mi 高松銀座7丁目店で開催しました。



(植嶋副会長の司会の下、西会長の新年の挨拶に続き、講演会が開催されました。以下講演の内容をお伝えします。なお、今回の講師は当会理事の中村陽子氏で、当日お配りしました書籍『お薬と奈良のお話』を出版されています。)

### — 講演会 —

**講師:** 中村陽子氏(当会理事、元厚生省医薬安全局安全対策課安全対策企画官)

**演題:** 『お薬と奈良のお話～医薬の旅～奈良再探訪』

**中村:** 私は、奈良県桜井市生まれ、奈良女子大学文学部附属高校卒です。京都大学薬学部を卒業した後東京に出てきて30年弱厚生省のお仕事をして、2001年1月に50歳で退職しました。医薬品の副作用や医療事故が起き、マスコミ対応や製薬企業や病院との対応に追われているうちに、その頃の私の発言の主語は「厚生省」「国」になっていたと思います。「あなた自身がどう考えているの」と問われ、私個人の意見を持っていないことに、辞めてから気づきました。私自身の言葉で話したいと思っても、国の代弁者という思考回路から抜け出すのは、なかなか出来ませんでした。

20世紀後半、私たちの生活はめまぐるしく変わりました。忙しい、忙しいと時間に追い立てられ、競争社会の中で遅れまいと通勤電車に乗って、人間的な暮らしから遠ざかってしまいました。東京で生活していると、なかなか奈良にも帰れないのですが、奈良に戻ると1300年経っても全く変わらないものがあり、悠然とした流れのなかで変わらなくてもいいのだという安心感、やすらぎ感に浸っていられます。

**薬って何だろう?その答えは薬師寺に**

さて、お薬と奈良の話ですが、奈良県で薬で有名な町は高取市です。最初に、高取の(元)製薬企業社長さんに「医薬品って何ですか」と聞きました。「お薬って命かな。」「薬では高取は新しいのであまり何も無い。薬師寺を紹介してあげるから。」とおっしゃって、薬師寺を紹介していただきました。

薬師寺は680年に天武天皇が皇后の病氣平癒を願って建てられたお寺です。薬師寺には薬師三尊像がありますが、正



面に薬師瑠璃光如来がおられ、両隣には日光菩薩さんと月光菩薩さんがおられました。薬師如来さんは、黎明の中におられ瑠璃色の光を放つ仏さまなのだそうです。私たちが、普段仏壇の前で手を合わせる仏さまは、死後の世界の仏さまで西に向かって拜むのですが、薬師如来さまは生きている人を救うための仏さまで、現世の苦しみを救い、未来に向かって生きるために薬壺を持って立っているのだそうです。「中央の薬師如来がお医者様だとすると、日光菩薩は日勤の看護師、月光菩薩は夜勤の看護師。」というようなお話も伺いました。

薬師寺の開祖は、孫悟空の三蔵法師の玄奘三蔵です。玄奘三蔵さんは、中国から禁を破って密出国し、灼熱の砂漠を進み、標高5000m級の山を越え、インドで修行してから17年間かけて唐へ帰国されます。持ち帰った仏典を生涯かけて母国語の漢文に訳したそうです。どう表現すればいいのか分かりませんが、凄まじい行動力、覚悟、とにかく超スゴイですね。薬師寺には薬師経もありました。現世の救いを求めて、長い歳月をかけて未知の国に旅し、命がけて持ち帰って、一生涯かけて翻訳した薬師経。薬師の教科書かもしれません。薬って何だろうというのが、長らく薬関係の仕事をしておりましたが、なかなか分からないです。

**奈良時代に日本の最初の医療制度**

今日は節分。お水取りが終わると春が来る。東大寺の最大の行事のお水取りの話に移ります。お水取りは、ご承知のとおり、旧暦二月の法会なので修二会ですが、お籠りになるお坊さんたちが、私たちを代表して、盧舎那仏に懺悔しながらお祈りをさせていただく行法のようなのです。盧舎那仏は華嚴宗の中心で、光の仏さまを意味するそうですが、光の仏さまがあまねく照らし出して、照らさない時も照らさない所もない。闇や悪にも光がそそがれて、影の部分がない。万物すべてに光がそそがれ、生きているものすべてがキラキラ輝くそうです。すべてありのままに照らしていただけるそうです。

修二会では、日記が付けられています。毎年毎年の記録が残っているから、続いている証拠にもなっているのですが、修二会は、同じ場所で、同じように行われて来て、まだ続いていて、これからも続けられるであろうというのは、奇跡ともいえるし、永遠の命という気がしています。

大きな盧舎那仏、大仏さまを造られた聖武天皇の時代は、痘瘡が大流行したり、生駒断層帯で直下型大地震が起きたり、干ばつや飢饉が発生し、不安定な世の中でした。光明皇后は、世界で初めて国の施設として施薬院を設けて、薬草栽培や薬の備蓄や施薬が行われています。続日本紀には、地方諸国で病気が発生するとすぐに都に伝えられ、その都度、医が派遣され、薬も届けられたというような記録も残っています。女医さんの養成学校もありました。奈良時代には、日本の最初の医療制度が出来上がっていたようです。

聖武天皇が大仏を造りましたが、世界最高の巨大な黄金の鋳造物を三年程度で完成させるという国家的大事業です。日本の科学技術が優れていたから、あるいは指導者がよかったから、と一言で済ませられるようなことではないですね。不安な世の中に、光の大仏を造り、安心できる国にしたいという思いで、国家プロジェクトを実施に移されたと思います。

聖武天皇は「大仏造立は、自分の金や権力を使ったら簡単にできるけれども、それは逆効果で、皆が自主的に協力して初めて安心できる平穏な世の中が実現できる。」ともおっしゃっており「私の思いに賛成し、一本の草、一握りの土、わずかでもいいので、参加しようと思う人がいれば、一緒に大仏を造ろうではないか。」と呼びかけています。誰が何をどれだけ持ってきた、というような台帳も保存されているそうです。この呼びかけに応じて貢献したボランティアは260万人、この人数は当時の推定人口の半分にあたるそうです。

1180年12月、平重衡は南都を焼討ちし、興福寺や東大寺など平城京が焼かれてしまいました。焼けて無くなってしまいました。東大寺は修二会中止の命令を出したようです。しかし、お坊さんたちは、命令に従わずに修二会を行っています。日記には「修二会の行法は、先人たちが欠かさず続けてきたことである。止めるのは簡単だけれども、止めて一回でも中断したら、後で再開してもしようがない。食べ物もないが、氷を割って行水をして、修二会の行に臨む。」というようなことが書かれています。昔の真冬の奈良盆地です。底冷えの中で何も無い。そんな状況でも、中断させなかった先人がいた。それに比べたら、中止すべき理由なんか無い。修二会は752年の大仏開眼法要の年から滞ることなく今年で1264回だそうです。よく分からないのですが、何かがある。祈りの心なのでしょうか。

お薬も祈りです。二月堂内では牛玉というお札が刷られて信者さんに返されますが、にかわの入っていない本物の墨に、本物の牛黄を混ぜた墨汁で刷っておられるそうです。牛黄は、現在も、解熱や気付け・動悸に効く医薬品の有効成分として使われています。

修二会も東大寺のお坊さんだけでなく、多くの人々が自主的に係わり参加する行事なので、中止されないような仕組みになっているのではないかと思います。次の年も、また、次の年も、滞りなく実施する行事。期待する方も期待される方も、お互いが信頼し合って責任を持って継続していくというのも、これはまた大変なことだと思います。

### 宇陀郡周辺の野原が最初の薬採取場 現在の大手製薬会社のルーツ

お薬の話に戻りますが、奈良県宇陀郡周辺の野原が最初に薬採取が行われた場所です。推古天皇時代に、「夏の5月5日に菟田野に薬獵をする」というようなことが日本書紀に書かれています。聖徳太子のような男性達は馬にまたがり薬になる鹿狩りにでかけ、女性達は菖蒲等の薬草を摘みに行った。津村順天堂の津村家、藤沢製薬（現アステラス）の藤沢家も、ロート製薬創業の山田家も、宇陀、菟田野周辺です。薬文化も、現在に至るまで継承されていると思います。

江戸時代の薬の振興策をご紹介しておきたいのですが、江戸時代も薬は中国産が使われており、経費がかさんで幕府の財政難を招いていたようです。享保の改革で、吉宗将軍は国産の薬を作ろうと全国の薬用資源調査のために採薬師制度を発足させ、江戸に小石川御薬園を作り、各地にも植物園を作っています。

宇陀に住んでいたの第十一代森野藤助さんは植物に詳しく、1730年頃に江戸から赴任してきた採薬師に仕えて畿内を案内して、各地から集めた薬草や徳川将軍からもらった薬草を育てて、薬草園を作りました。森野家は、有名な“本葛”の本家で、初代の森野藤助さんは、吉野でイノシシがクズの根っこを食べていたのを見て、葛に栄養があることを発見し、葛粉製造を始められたそうです。葛作りの場所を見せていただいたのですが、葛は本当にこんな太い根なんですね。人間の胴体くらいの太さの根を掘り出す作業も大変で、真冬の寒さの中で、綺麗な地下水にくぐらせて真っ白な葛デンプンが出来上がってくるそうです。厳寒の中で、あの季節だから、真っ白な葛ができるのだと思いました。

江戸幕府の御薬園や諸藩の薬草園は、明治時代に相次いで廃止されましたが、森野藤助さんが作った薬草園では薬草の育成を続け、江戸時代の面影を残す希少な薬草園として、生きつづけています。薬草は生きています。森野薬草園の植物管理方法は、半栽培・半自然のモデルとなっていて、近代的な植物園とは異なるシステムで生物の多様性が守られています。山の斜面なので、今でも機械は入れておらず、自然の中で半自然、手を掛けるところは手を掛けて半人工でやっておられます。皆様方には、是非、一度は、日本で初めて薬がとれた場所、お薬のふるさとでもある菟田野に行ってほしいと思います。行っていただいたら、直に感じていただけるのではないかと思います。

大峰山の役行者さんの話もしたいと思います。天武天皇時代に、役行者が生まれた茅原寺、今の吉祥草寺の大きなお釜で大峯山のキハダの樹皮を煎じて、疫病に効く薬を作っていました。有名な“陀羅尼助”の始まりだと言われています。陀羅尼助は、陀羅尼経のように有り難い効き目があり、陀羅尼経を唱える時の眠気防止によく効くことから名付けられたようですが、現在も有名なお薬ですね。

ここにおられる馬淵先生が、以前、奈良県人会にご出席された時に、奈良は始まりの奈良で、奈良から始まって、奈良からどんどん日本中に伝播しているとお話しされたように思います。私は、お薬は命である、東大寺のお水取りも継続性ということでは1000年以上繰返され、永遠の命のようで、これから1000年経ってもきっと同じことが行われるだろう。そういうことを考えると継続性って本当に何なのだろうかと思っております。

### 奈良県の薬業振興に向けて

奈良と医薬の話に戻りますが、国や自治体は、法制度を作って、薬業を振興したり規制したりします。法制度を作っただけでは機能しない。制度を使いこなして、血を通わせていい制度にして行くのは民間だと思っています。制度を使う人が、その使

い勝手がまずいところを、国に訴えていかなければ、いい制度にはならないような気がします。私が中央官庁にいた時は集団相手のお仕事で、直接応対できる民間の方は限られていました。今役所を離れて1人の民間人として生きていることをとってもらい感じています。薬事制度は、医療保険制度や介護保険制度の社会福祉制度など、生活に密着した制度が多くあります。使い勝手のいい制度になって行けばいいなあ、いい制度にしていきたいなあと思っています。

奈良県は薬業振興に力を入れておられます。東京奈良県人会も、県の薬業振興を助けるような事業もできるかもしれません。私も理事をしておりますので、東京奈良県人会に対し、継続的にご支援いただきますように、よろしく願いいたします。

**司会:** どうもありがとうございました。一般社団法人化した目的は中村理事から話がありましたように、事業もできる、事業の主体となれるということでございますので、7時半から懇親会で、ぜひまた中村さんと一緒に話をしてもらえればと思います。それではこれで講演会の部は終了いたします。



**柿本副会長:** 2015年の奈良県人会新年賀詞交歓会にかくもたくさんの皆さんにお集まりいただきまして、ありがとうございます。去年は確か50名くらいだったと思います。今日は75名を突破して80名近くという数字で、これはひとえに今日司会をしてくれている藤本理事と若手の会のメンバーがたくさん出席していただいているおかげです。

この若手の会の皆さんはあと10年もすれば堂々と県人会正規会員になれますので、これは本当に素晴らしいアイデアです。他の県の県人会もやはりなかなか集まらなくて苦労されているわけですけど、我が西会長の奈良県人会はそういう手を盛んに打って、私がまた奈良県人会若手の会育成部会長で、これを担当させてもらってまして、若手の会の皆さん方とよくご一緒させてもらっております。

今日は中村理事が素晴らしい文化の香りがほとばしる、「薬は命だ」と、おっしゃるとおりでございます。私も吉野に生まれたのですけれど、奈良県は昔から薬で有名で、そして今は日本を代表するような製薬会社に育てた企業家も輩出しているということで、郷土の誇りです。

前回、県人会の分科会でやったときには、このお酒の始まりが奈良だということで、もうすべて奈良が始まりです。2015年は奈良県から日本を救わなければいけないというようなことをいろいろ一人ひとり祈念しまして、今日お集まりの皆さんのますますのご健勝、そして今年1年が素晴らしい年でありますように祈念しまして、乾杯の音頭を取らせていただきます。

それでは、乾杯！

**司会(藤本理事):** 最初に馬淵先生、ご挨拶をお願いいたします。

**馬淵(奈良市):** 先ほど中村先生の講演の中のお話にあった、

まさに共生の概念、この考えのもとに、この奈良という地・土地がこの国の始まりの地であるということ、私は常々そういうことをいろいろなところでお話しさせていただいております。

私自身、いろいろなところでお話をしているわけですが、なぜこの地が共生の地であり、その始まりの地であるかということなのですが、私自身は企業経営者でした。選挙に出るまでは会社経営をしてきたのですが、古い会社で創業85年の会社をやってきました。しかし一方でひもといていくと、世界長寿企業というのはたくさんあります。日本でも長寿企業はたくさんあるのですが、100年企業というのは世界に14000社あります。そして200年企業というのが実は4000社なんですね。この4000社という数は何と日本での話で、これは世界では断トツの数です。第2位がドイツで、1875ですからもう半分以下ですね。それ以降、イギリス、フランスと760、670と続きます。なぜこれほどの長寿企業大国になったか。そこには実はグローバリズムの進展の中で、利益や価値、合理性を求める企業にはない、いわゆる家族主義経営、これが根幹ではないかということの世界に冠たるさまざまな研究者がこれを見出し発表しているのです。

このグローバリズムの中で、家族主義それこそお互いが認め合い、慈しみ合いそして豊かな営みというものをわずかな我慢によって得ることができる。こんな価値観から日本は長寿企業大国となっているという論文でありました。

翻って私たちがこの日本という国を考えたときに、奈良が発祥の地・始まりの地、それこそ橿原の地で神武天皇建国の詔、私はいつもこれを言うのですが第1節には、「おおみたからにくぼさあらば なんぞひじりのわざにたがわん」、という言葉があります。おおみたからというのは、国民のことなんですね。国民をたからと呼んで、くぼさというのが利益の利と書きます。国民が喜ぶことは、聖のわざ、政治です。政治として最も正しいことだというのが、この建国の詔には書いてあるのです。そして最後の節には、「あめのした、おおい、国民をひとつの屋根の下に暮らすこと、家族のように暮らすことは最もよきことということが書かれています。

日本人の価値観、概念がまさにここに凝縮されています。ですから私はこの地が、この始まりの地であるということを申し上げているのは、まさに中村先生へのお答えとして十分かどうか分かりませんが、こうしたこの国の価値観、これが奈良の地から生まれ出たのだということを信じております。

今日お集まりの皆さんは行政あるいは企業関係、あるいは学識者関係さまざまな方がお集まりだと思いますが、まさにこの奈良県人会があめのしたをおおい、そして家族のような会となることを心から祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

(歓談)

**司会:** それでは初参加の方にご挨拶をお願いします。

**中村:** 木村篤太郎事務所の小志田さんの後任の中村です。

私は日刊工業新聞社を辞めて以来、雑誌記者とか何かの仕事をして、今は木村副会長のご紹介でNPOで事務的な仕事をさせていただいております。この奈良の会も2回目で奈良の旅行にも5、6年前に行ったことがございます。私は友人にも奈良の人が多いのですが、非常におっとりとかどっしりと構えているとか落ち着いていると感じております。東京とか他の大都市辺りは非常に浮ついているとか、ギスギスしている感じなのですが、この会に入られた方は非常に落ち着いておられるのが、私の昔の新聞記者の勤で感じられました。

**大村(大和郡山市)**：去年の7月にアメリカから戻って来まして、今日初めて参加をさせてもらっています。実はアメリカではニュージャージーというところにおりまして、ニュージャージー、ニューヨーク、コネチカットをカバーするニューヨーク奈良県人会というのがありまして、そこで3年お世話になりまして、エネルギーをもらったという縁で、今日参加をさせてもらいました。

会社は信越化学という化学の地味な会社なのですが、シリコンという材料を扱っておりましたので、また何かご縁がありましたらぜひよろしくお願いたします。

**橋(奈良市)**：私は36年間農協の世界に身を置いてまして、32年間は全農というところにおりました。3年間は奈良県農協にオファーがあって役員をやっていました。それで辞めまして、また東京に戻ってきました。家族は奈良におります。今日も薬の話がありましたけれども、奈良は農業の世界で言うと鎌倉とか室町の時代は日本一の農業国だったのです。そのとき桜井とか天理、あの辺りは大小麦生産地で、それが三輪素麺の原料になり、そこで製粉業というものが発達したので今の奈良県民は、全国一番の消費量が多い、お米より多い。そういう日本の文化のルーツというのは奈良にあります。食も農業のルーツも全部あります。薬と農業で言いますと、大和売薬と言って全国を行商するときに粗品景品を持っていくときにスイカの種を配ったんですね。それで全国にスイカが生まれたのです。現在もスイカの種はシェア1位が奈良県と。熊本県産スイカの種は、奈良が全部作って送っているということで全てそうなんです。皆さん現在お使いのお箸ですね。これは8世紀に遣隋使が来るまで、日本人はみんな手で食べていたのです。フランス人もメデチチ家から嫁さんをもらうまでは手で食べていました。聖徳太子が中国の役人が来るのに手で食べていたのでは恥かしいということで箸を作れと言った。そのときに吉野杉で作ったのが箸の発祥と言われております。

全ての産業というのは農業と一緒に始まってまして、今の婚活、合コン活動も長谷の歌垣というのが最初になっています。そういうことで、日本一の文化とルーツを持っているのですが、いかんせん今は地盤沈下が激しい。東京でこの県人会の一人として役割を果たしながら、ぜひとも奈良県のブランド発展のためにまた尽したいと思っております。

**田中(橿原市)**：50歳までいろいろやっていたのですが、数学が得意だったということで51歳のときに、やはり数学を生かしたいということで会社を立ち上げました。その会社名は数学ということで、技術と数学という会社名にしたんです。ちょっと不

細工だというので技術を英語に替えて、テクノロジーと。それから数学はマセマティクスということで、テクノマセマティカルという会社を2000年ですね。ちょうど私が51歳のときに立ち上げて、それで数学を生かした仕事をやっておりました。幸いにも時流に受け入れられて、2005年には東証マザーズに上場することができまして、大変感謝をしています。そこから10年経って今年の6月で15周年ということで15周年記念パーティーをしたいなあと皆で言うておりますけれども、この奈良県人会というのは全然知りませんでした。3年くらい前に私どもの副社長が岐阜出身なのですけれど、岐阜県人会というのを読んでいるのを見て、奈良県人会もあるのかなと思って調べたら出てきて、それで3年くらい前にあるということを知って入会させていただきました。

しかし残念ながらまだ走りかけの会社なので参加はこれで2回目くらいだと思うのですが、これからはいろいろ参加と、やはりそういうふうなかたちにさせていただいているので、皆さんにいろいろ御礼もしいないといけないなということで、取りあえずは参加回数を増やそうかと考えております。

**前原正美(桜井市)**：私は藤原氏族会に所属し、藤原鎌足・不比等、石田三成の研究者で大学教授です。藤原氏族の石田三成の御旗「大一大万大吉」には「愛の精神」が示されています。それは「天のもと、一人が万民のために万民が一人のために生命を注げば、すべての人間の人生は吉となり、泰平の世が訪れる」(『愛・時を超えて—私説・石田三成—』前原出版 1998年)という精神です。私は、奈良が生んだ歴史上の人物の「愛の精神」を伝えています。

**前原直子(桜井市)**：私も、藤原氏族会に所属しています。現在私は、中央大学経済研究所にて、藤原鎌足・不比等やその末裔の石田三成、三成の家老の島左近の研究をしています。三年後のNHK大河ドラマは「石田三成」の予定です。石田三成や島左近は、奈良が生み出した人物です。また奈良には、神社や仏閣など日本の伝統の素晴らしさがあります。私は、こうした奈良の歴史や伝統文化を世界に伝えています。

**巽(山添村)**：私は奈良県在住なのですが、こちらに単身赴任で来ております。(株)ウチダ和漢薬にいます。中村先生には1年間ウチダ和漢薬が発行しています『月刊和漢薬』という雑誌に原稿をお願いしまして、1年間、原稿を書いていた結果が今日の小冊子になっているわけです。中村先生に、最初お願いしたのは、漢方薬とか生薬とかの限定された話題についての行政的な見方だったのですが、飛鳥時代からのスタートで、最初はどこまで続くのかと思いましたが、奈良時代でうまくまとめていただきました。1500以上の関係先に配布しているのですが、編集部の方に、いろいろな感想や中村先生の原稿に対する次の期待とか結構反響がありまして、編集部としては反響のあったものを書いていただいて感謝しているところです。(拍手)

**木本**：皆さん、こんばんは。この会の副会長で先ほど乾杯の挨拶をしていただいた裕本さんに普段から大変お世話になっておまして、9名で、「チームヤタガラス」という会を作って裕本さ

んが世話役というかたちで私がおの下働きで、いろいろ企画したりそんなことをしております。

前に柿の葉寿司の試食につられて、それからその前、やたがらすというお酒のときに誘われて、我々のチームの名前の元になったヤタガラスの名前が付いているお酒かと思って参加させてもらって、次は柿の葉寿司だとか言われて。朝の連ドラで柿の葉寿司をやっているところがあって、どんなのかなあと思っている矢先にそれを言われたので、つい食欲で、コッソリとたくさん食べさせて頂きました。

商売のほうは自動車の整備工場を板橋でやっておりまして、生まれも育ちもずっと東京なのですけれど、こういう会に参加させていただきながら、若いころは歴史とかそういうことがちょっと頭に入ってこなくて、理数系のお勉強は好きだったのですけれどおろそかにしていたところをこういうところで少しずつでも回復とかちょっとでも吸収させていただける機会になればなと思っています。日本の原点の奈良のことをいろいろとちょっとずつでも勉強させていただければと思ひまして参加させてもらっています。

(最後に会場準備をお手伝いいただいています養徳学舎の稲田舎監のご挨拶、同寮生自己紹介につづき、竹内元最高裁判事による中締めのご挨拶と木村副会長の三本締めにより、盛会の内にお開きとなりました。)

**司会:** 親睦会も1時間を過ぎてきまして、そろそろ中締めということに移りたいと思います。

今回中締めをお願いいたしましたのは、若い人からすると、すごいなあという方です。外務省の事務次官をなされまして、その後最高裁の判事をされ、去年なんと旭日大綬章を受賞されました竹内先生をご紹介したいと思います。

**竹内(奈良市):** 竹内です。今日は奈良再探訪ということでいろいろお話を伺いながらも、もう一度自分の心の中で、ふるさと再探訪をしておりました。私は大学を卒業するまで奈良に住んでおりましたので、子ども時代、青春時代、マドンナの記憶も含めてですね。それと家族との生活、友達との生活。今日は奥野先生が来られておられないようすけれども、私の母親は101歳でございます。ちょうど奥野シニアのほうと同じ年の生まれ、大正2年生まれです。今はもう毎日記憶が薄れていく。今日が最期かなと思うような日が続いている。しかしなかなかしぶとくて。うれしいことでございますけれども、でも変な話ですけれど、去年の5月の連休のときには一緒に歌が歌えたのです。昔の文部省唱歌、小学校唱歌みたいなものですね。歌詞を私が大きな字で書きまして、彼女はもうほとんど耳が聞こえないんですよ。それでも歌は歌えるかと思ってですね。例えば「遠き島より」という「やしの実」の歌詞を書きまして歌い始めたら、一緒に歌を歌えたんです。これは涙が出るような光景です。古希を過ぎた息子と101歳の母親とが一緒に歌を歌う。そういうことも今はかなわなくなりました。

先週も訪ねてみたら、もう寝たきりなのですけれど、ずーっと天井を見ているんですね。私がおそこに行くと、ジーッと見て見つめるのですけれど、3分間くらいただただ見つめているんです

ね。この人誰だろうと。ところが3分後くらいに一瞬にしてフワッと顔が笑顔になる。記憶がよみがえったんですね。「よく来てくれたわねー、ありがとう、ありがとう」と言う。そういう光景があります。しかしそれはまた10分くらい経つと消え去ります。それでまたその繰り返しをやる。一瞬一瞬が生きている瞬間というような状況です。いろいろ昔のことを思い出したりして、年を取るということはどういうことかなと自らも若くありませんので、先ほどの若い方の話を伺っても、来る時は来たなと私自身も思うのですけれど。

話は変わりますけれど、今日は奈良再探訪ということで1つだけお伝えしておきたいと思ひますのは、皆さんの中で、「明教館」ということを聞かれた方がいるでしょう。

明教館というのは、明治の「明」に教育の「教」、それに館やかたですね。奈良にあった藩校ではないんです。あそこは天領地でしたから藩ではありません、幕府の直轄でしたのでね。しかしそこで塾しゆくとか学校があったのです。その名前を明教館と申しまして、江戸幕府の奉行所が奈良女子大の所にありまして、そこを道で隔てた北側に我が家がありまして、北袋町というところなんです。それから笹針とか法蓮とか聖武天皇の御陵のほうに行くのですが、道を隔てた北側に明教館という学校がありました。その学校の校長とか塾長をやっていたのが実は私の母方の祖先でございます。そういうことですので奉行所の奉行との交流関係等もあったようでございまして、そういう歴史的な交流はあるのですが、最近奈良市でも、「きたまち」というのを一生懸命掘り起こすということをやっております。

そのきたまちというのは奈良女子大の辺りから、北のほうで、聖武天皇の御陵であったり、コスモスのお寺で有名な、般若寺はんにゃじがありますよね。東大寺より北側。佐保川が流れていて吉城川が流れて。佐保川というのは若草山があると若草山の北側から流れるんですね。春日の奥山のこちら側、春日野の奥山のほうからチョロチョロと流れ出るのは吉城川です。それが法蓮というところで合流をしまして、それでずーっと郡山のほうに流れていく佐保川と混流になるわけです。その辺を「きたまち」と称して、ちょっとツアーを組んだりするようなことがありまして、その中に本来含まれるべきもののひとつがこの明教館という学校であったのに、今や我が家の住宅になったりして、見る影もございません。そういう明教館という学校があったということは、奈良再探訪ということで、今日お伝えしたいと思ひます。



## ●● 2014年度の若手の会のご報告 ●●

理事(若手の会担当) 藤本 和夫

一昨年の奈良フェスタを機に創設された「若手の会」。2014年度の若手は急速に発展する一年となりました。2013年度末に100名程度だった会員数が、2014年度末には、250名までに拡大することができ、新規にイベントに参加いただいた方も70名を超え激動の一年だったと思います。

下記はこの一年のイベントの内容です。

日にち 2014.04.05~06

場 所 明治神宮

内 容 なら燈花会のボランティア(参加者:延べ25名)

1999年に誕生した「なら燈花会」は、古都奈良にろうそくの灯りがとけ込み、人々の心にさまざまな感動を与えました。夏のたった10日間だけ、広大な奈良の緑と歴史の中にろうそくの花が咲きます。

このなら燈花会が、明治皇后の100年祭に合わせて、明治神宮の参道をろうそくで照らすお手伝いを若手の会で行いました。4月と云えど、夜間は冷え込みましたが、夜の明治神宮のライトアップを楽しむことができました。



日にち 2014.06.12

場 所 奈良まほろば館

内 容 第3回奈良若手の会

テーマ:柿の葉すし食べ比べ(参加者数:50名)

奈良県の五條市や吉野郡の郷土食である「柿の葉すし」を5社取り寄せ、その風味の違いを堪能させてもらいました。この企画、奈良在住の方からも「奈良にいても同時に5社は食べる機会ないねえ」との声もいただきました。

各社ご飯の硬さや、酢の利かし方、鯖のしめ方等、同時にいただくからこそ分かる各社の拘りが感じられました。

日にち 2014.12.05

場 所 レストラン高松 銀座7丁目店

内 容 第5回奈良若手の会

テーマ:忘年会(参加者数:68名)

奈良県東京事務所の共催で、真言宗豊山派総本山長谷寺「小林先生」の講話に始まり、親睦会では、会員のクラリネット演奏、奈良クラブ応援歌の熱唱、参加者が持ち寄った43点の景品で大クジ引き大会を開催。大いに盛り上がった年の瀬となりました。



日にち 2015.02.14

場 所 奈良市

内 容 第6回奈良若手の会

テーマ:初めての郷土訪問(参加者数:18名)

東京から15名、奈良に戻られた方3名、合計18名が奈良県の中西審議官のご案内のもと、東大寺、春日大社を参拝。日頃は見学できないところまで見学でき、豆知識をたくさん仕入れることができました。その後、場所を奈良公園に移して、「なら瑠璃会」を見学。

公園をライトアップする様は絶景。若草山からは花火も打ち上げられ素敵な奈良公園の誕生の日を祝うことができました。



日にち 2015.03.13

場 所 奈良まほろば館

内 容 第7回奈良若手の会

テーマ:ならの和菓子食べ比べ(参加者数:63名)

奈良では有名だけれど、なかなか東京では口にすることができない和菓子を取り寄せ、お抹茶でいただきました。中でも日持ちの問題で当日限りの櫃原「だんご庄」と吉野「こばしの焼もち」は、朝、奈良で仕入れて、この会に間に合わせました。

尚、この発展には奈良県東京事務所のご支援やご協力が大きく、感謝申し上げますとともに、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

## ●● 奈良まほろば館からのお知らせ ●●

奈良県人会の皆様には、平素から奈良まほろば館の運営にご支援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、今年4月より6年目に入った奈良まほろば館は、大和野菜などの生鮮食料品を求めて来館されるお客様も増え、昨年度はオープン以来最高の来館者数を記録しました。今後とも、奈良の魅力を首都圏で発信し、奈良ファンを増やしていけるよう努めてまいります。

なお、今年度上半期に予定している主なイベント等は下記のとおりです。

皆さまのご来館をお待ち申し上げております。

### ——● 27年度奈良まほろば館 上半期の予定(4月～9月) ●——

#### 4月

- “NARA=MAHORоба”  
～The Nature, Culture & Produce of Nara～
- 唐招提寺の魅力と伝統行事(うちわまき)等を紹介

#### 5月

- 大和路秀麗八十八面観音巡礼
- 橿原考古学研究所附属博物館(春季特別展)  
ブリーフガイド

#### 6月

- 食と農のプロモーション(大和野菜などのPR)
- 写真展「私がとらえた大和の民俗～食～」

#### 7月

- 「記紀・万葉でたどる奈良」パネル展
- 橿原考古学研究所附属博物館(速報展)ブリーフガイド
- 奈良県景観資産パネル展

#### 8月

- 自転車利用促進PRパネル展、トークショー開催
- 纏向遺跡、オオヤマト古墳群、唐古・鍵遺跡等の紹介  
(桜井市・天理市・田原本町)

#### 9月

- 吉野町観光PRと森林セラピー等を紹介(吉野町)
- 食と農のプロモーション(大和野菜などのPR)
- 斑鳩ってこんなところ! (斑鳩町)

このほかにも、「南都法話会」、「奈良・シルクロードの会」、奈良女子大学との連携講座や写経教室等の文化講座を実施します。

※ 今後の状況により変更・中止する場合がございます。  
あらかじめご了承ください。  
また、詳細情報や申込み等は奈良まほろば館のホームページをご覧ください。また、お問い合わせください。

<http://www.mahoroba-kan.jp/>  
電話:03-3516-3931

#### 【観光案内のご紹介】

奈良まほろば館では、県内各市町村の旬の情報を掲載したパンフレットを設置するほか、観光案内の専用カウンターを設けて観光コンシェルジュによる観光地のご案内も行っています。

当館を訪れるお客様のニーズは千差万別で、交通機関の乗り継ぎや宿泊施設の紹介をご希望される方から、桜などのお花の見頃や伝統行事(修二会等)の詳細なスケジュール等をご質問になる方まで、多い日は30～40件にもなります。

奈良に行く前に、当館の観光案内をご利用の上で訪ねていただくと、また違った魅力に触れることが出来るのではないのでしょうか。



## ふるさとコーナー 都市力創造の街 香芝市

香芝市は、奈良県と大阪府の府県境に位置し、交通の便にも恵まれ、住環境も良いことから、昭和40年代、50年代ころから急激な人口増加が始まり、都市化が急速に進展し、平成3年10月1日に市制を施行しました。現在、増加率は、やや鈍りましたが、人口の増加は一貫として続いており、今後も、その傾向が続いていくことが予測されている全国でも数少ない都市のひとつです。

また、平成26年10月1日現在で、年少人口比率は17.22%、高齢者人口比率は20.56%と、奈良県の中では、最も年少人口比率が高く、高齢者人口比率が低い、子育て世代が多く住む非常に若いまちでもあります。



面積は24.23 km<sup>2</sup>と市域は大きくはありませんが、その中で、鉄道路線、主要幹線が市内を縦横に走り、都市の要素が多くある一方で、緑豊かな自然にも恵まれ、古代ロマンの香りを感じさせる名所・史跡も多く点在しています。

その中のいくつかを紹介させていただきますと、まず、奈良県の天然記念物に指定されている「どんづる峯」です。「どんづる峯」は、いまから1500万年から2000万年前に二上山の火山活動とその後の風化・侵食などの地殻変動という自然の力で現在の風光明媚な名勝となりました。最近、マスコミ報道で取り上げられることも多く「日本のカッパドキア」として紹介され、注目を浴びています。

次に、市の北部の尼寺地区では、平成8年に国内最大級の約3・8メートル四方の巨大な心礎(塔の心柱の礎石)が出土し、南北71メートル、東西44メートルの法隆寺式伽藍<sup>がらん</sup>の寺跡(北麩寺)ということがわかり、現在、整備が進められています。整備後は、市の新たな観光スポットとなることが期待できます。

このように、香芝市は、「都市」と「自然」、「未来」と「伝統」が共存する都市なのです。

このような特長が人々の評価を高め、大阪都市圏の住宅都市として発展してきたわけですが、今後は、さらにステップアップしていくための「都市」としての魅力の向上に取り組んでいるところです。

その中で、今後の「まちづくり」のキーワードとなる「市民協働」による新しいイベントが香芝市に根付きつつあります。

その一つ目が「香芝ふれあいフェスタ」です。例年11月の第1日曜日に市と市民団体で構成されている「実行委員会」が協働して実施しており、平成26年には市民参加による「よさこいソーラン祭り」が行われました。



二つ目は「冬彩」です。平成13年に、市民が主体となって香芝市制10周年を機に開催されたもので、その後、例年12月の第3土曜日に実施されています。冬の寒空の下、花火が打ち上げられるなど、光と音の祭典として、香芝市の冬の風物詩として、すっかり定着しました。

そして、三つ目が、平成26年度に初めての開催となった「産業展」です。「まち・ひと・しごと創生」として、地域経済の活性化の必要性が求められる中、市内の企業、産業力を広く市民に知っていただくために開催したものです。

このような形で、香芝市では、新たな地域活性化のための取り組みが徐々に進みつつあり、市民との協働により新たな都市力が創造されつつあります。

この中でご紹介した様々なイベントなどの機会に、是非、香芝市を訪れ、観光地を巡るなどして、香芝市のまちの雰囲気味わってもらえればと思います。



## ふるさとコーナー

歴史と文化が  
深く息づく

## 大淀町



大淀町は、奈良県の中央、紀伊半島のほぼ真ん中に位置します。

町の南には吉野川が流れ、その背景に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」である吉野郡山が重なり、豊かな緑と清流に恵まれた町です。



古くから大和盆地と吉野地方を結ぶ要衝として主要都市との交通の便が良く、文化・産業の面でも重要な位置を占めます。現在では住宅開発も進み、幹線となる国道169号線を中心に自然豊かでありながら「便利な田舎暮らし」ができるまちとして賑わいをみせています。

自然に恵まれた温暖な気候となだらかな丘陵地は、日本茶や梨・ぶどう・りんごなどの果樹栽培に適しています。特に梨は明治35年ごろから栽培が始まり、現在では約50戸の農家が栽培しています。大阿太高原では、毎年夏から秋にかけては梨狩りで大変賑わい観光農園とともに大淀町の特産品として全国的にも高い評価を得ています。ぜひ本町にお越しの際は、甘くて瑞々しい自慢の梨をご賞味いただければと思います。

又、今日新しい名物として注目を浴びているのが特産品の番茶を活かした「グルメ」や「スイーツ」です。大淀名産の「日干番茶」は、日本茶の葉をよく蒸したあと「天日干し」にする独特の製法で、まろやかで渋みがなく香り高い味わいが特徴です。その「日干番茶」をより多くの人に伝え味わっていただくため、大淀町商工会番茶プロジェクトが風味を活かしたパンやロールケーキ、プリン、わらびもちなどを開発し道の駅 吉野路大淀iセンターなどで販売し大変好評を得ています。

本町の文化・歴史を背景にした観光面におきましても多くの見どころがあります。

国の指定文化財で聖徳太子が創建したとされる比蘇寺（現在の「世尊寺」）は、「日本書紀」の記録や瓦などから少なくとも飛鳥時代には存在していたと推測され、県指定文化財である太子堂や仏像など数多くの歴史的な文化財が残されていることから、ハイキングや寺社巡りなどたくさんの観光客に訪れていただいております。又古墳も多く吉野郡内にある66基ほどのうち52基ほどが本町にあり、中でも斉明天皇の孫で持統天皇や大田皇女を姉にもつ建王（8歳で死去）のなきがらを置いた「もがりの場」とされる保久良古墳は、古墳・歴史愛好家をはじめ中高年の方々の哀愁を誘い、郡内周遊には欠くべからざるスポットとして注目を集めています。



さらに本町は、世界文化遺産である「能楽」のルーツとかわりのある「猿楽」の一座「桧垣本猿楽座」が根拠地として活躍していたことからその素晴らしい歴史・文化財産を後世に引き継いでいけるよう事業を展開しています。



大和盆地の明日香方面から町への入り口となる芦原トンネル南側に道の駅 吉野路大淀iセンターがあります。こちらでは、町の特産品をはじめ地域の新鮮な野菜を販売して人気を博しています。また、観光・地域の拠点施設として町内外への情報発信もしており、まさに吉野地方の要衝であり、今後ますます道の駅を利用した町の活性化が期待されています。

大淀を知って頂ければ知って頂くほど、本町ならではの新しい発見があります。四季それぞれにうるわしく数多くの歴史と文化が深く深く息づく見所満載の大淀町にぜひ皆様お越しください。

## ●● お知らせ ●●

## ● 奈良県東京事務所人事異動(4月1日付) ●

## [転出]

東京事務所所長代理 (知的研究活動推進担当)	中島 敬介 →	公立大学法人奈良県立大学 ユーラシア研究センター 設立準備室長
東京事務所副所長 (行政担当)	林 成光 →	観光局観光プロモーション 課長
東京事務所情報発信 課長	小嶋 宏平 →	農林部マーケティング課 課長補佐
東京事務所 知的研究活動推進 グループ調整員	松原 悦代 →	公立大学法人奈良県立大学 ユーラシア研究センター 設立準備室係長
東京事務所行政課主査	高安 信行 →	労働委員会事務局審査係長
東京事務所情報発信課 主任主事	山口 篤志 →	政策研究大学院大学派遣

## [転入]

東京事務所副所長 (行政担当)	森本 光博	(東京事務所副所長(情報 発信担当))
東京事務所副所長 (情報発信担当)	原田 徳義	(観光産業課主幹・ビジター ズビューロー事務局長)
東京事務所情報発信課長	林 増寿夫	(地域振興部企画管理室 企画調整係長)
東京事務所行政課主査	大森 大	(県土マネジメント部深層 崩壊対策室)
東京事務所情報発信課 主査	西田 尚子	(農林部農業大学校)
	小川 友文	(県土マネジメント部公共 工事契約課)

## ● 年会費納入のお願い ●

新年度の年会費のお支払いにつきましては、

## [振込先]

ゆうちょ銀行 郵便局用振替用紙  
(口座番号等:00170-2-323480)  
※他金融機関からの振込の場合は〇一九(ゼロイチキョウ)店  
(当)0323480  
南都銀行 東京支店(普)2002626  
一般社団法人東京奈良県人会 代表理事 西与吏郎

## [年会費]

賛助会員:1口2万円×2口以上  
参与会員:1万円 一般会員:3千円

また、昨年度未納の方は、別紙総会案内の下欄に印  
を付けておりますので、合わせて納入願います。

## ● 平成27年度総会のご案内 ●

来る6月9日(火)ホテルグランドパレス(東京・九  
段下)にて、平成27年度総会を18時30分より開催い  
たします。会場の詳細や出欠のご回答などは同封しま  
したご案内・はがきをご参照ください。また、御欠席  
の方は、同封のはがきにて委任状をご提出くださいま  
すようご協力をお願い申し上げます。

## 編集後記

この春から縁があり、都内の大学で教鞭をとっている。講座  
は、経済学部生向けの「都市計画とまちづくり」で産業面から  
地域の創生について講義して欲しいということだった。商店街  
の活性化や地域の産業集積の仕事もしていたので軽い気持ち  
で受けたが、これがなかなか奥が深い。いつの間にか古代  
大和の都市形成にはまってしまった。古代の港で遣隋使が出  
帆・帰帆した「海柘榴市(桜井市)」、これは大和川づたいでの  
大陸からの終着点。当時はまだ奈良盆地は湿地帯が多く、水  
運に適していたらしい。吉本隆明氏が舒明天皇の歌に「海原」  
「鴈」が出てくるのは池ではなく、当時奈良には海とつながった  
巨大な湖があった、との説を紹介している。ここで大きな発見を  
した。なんと京都から遷都の候補地に「大和(奈良)」が上がっ  
ていたのだった。歴史家によると、それを唱えたのは、薩摩藩  
士の伊地知貞馨(1826-87年)、慶応4年(1868)大久保利通  
が大阪遷都の建白を新政府に提出した。これを知った伊地知  
は大久保に、諸外国の例をあげて、大阪が海に面していること

が防衛上、不利だと説き、「大和」への遷都がふさわしいと主  
張、彼は「大和ならば、水の便は少々よくないですが、蒸気機  
関の川浚え機械によって、昼  
夜、浚渫すれば、ロンドン<sup>しんせつ</sup>のよ  
うに、小蒸気船が通行できる  
ようになるので、不都合はない  
と存じます」と主張した。もし  
伊地知の主張が通り、大和  
川が浚渫され、奈良が首都  
だったら今どうなっていたら  
うか?空襲で正倉院はじめ貴  
重な文化財もなくなっていた?  
「いや1000年に及ぶ近隣諸  
国との交流が功を奏し戦争  
はおきなかった」と学生に教え  
るつもりだ。(H.U.)



記念碑のタイルに描かれた遣隋使派遣  
遣送巻



テムズ川河畔のロンドン